

ちょっと気になるデータ

# 年齢階級別労働力人口比率

## —労働力調査(基本集計)2019年(令和元年)平均結果から—

今回は、前回に引き続き2020年1月に総務省統計局から公表された労働力調査(基本集計)の2019年平均結果の中から、年齢階級別の労働力人口比率(15歳以上の人口に占める労働力人口の割合。以下労働力率という。)についての統計をみてみたい。

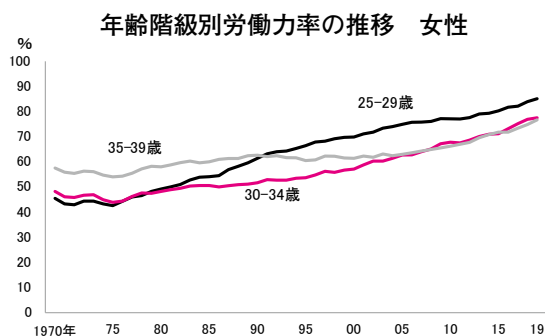
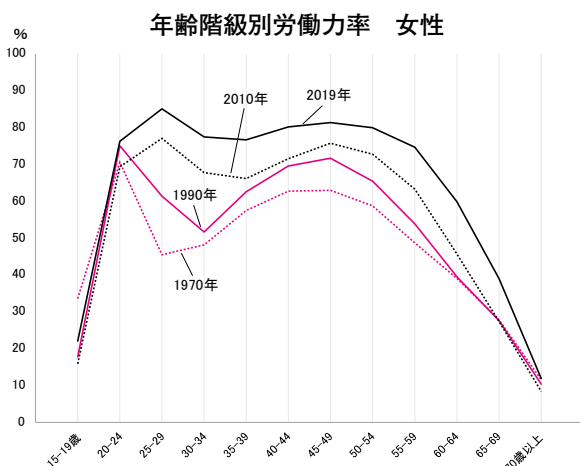
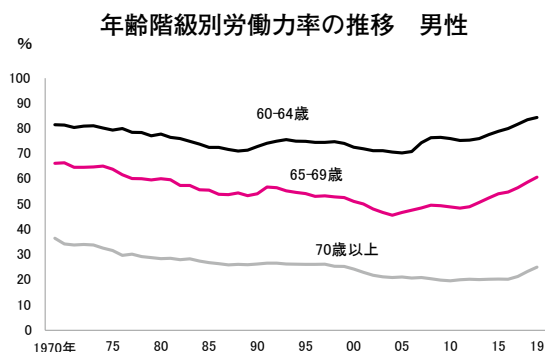
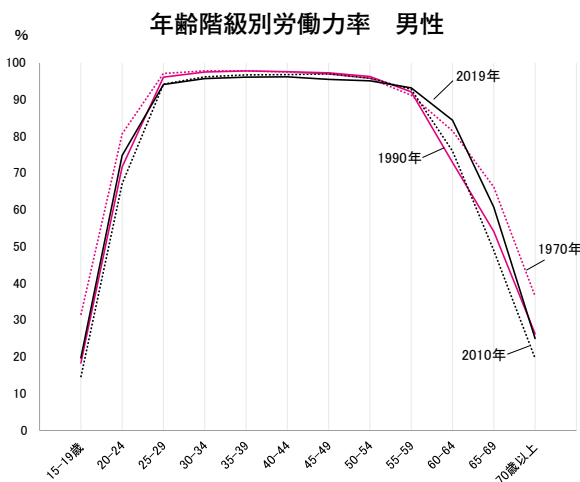
2019年平均の労働力率は62.1%で、前年に比べて0.6ポイントの上昇、男性は71.4%で0.2ポイント上昇、女性は53.3%で0.8ポイントの上昇となっている。

労働力率を年齢階級別(5歳階級別)にみると、男性は25~29歳から55~59歳まですべての年齢階級において95%前後で推移している。女性は25~29歳で85.1%、30~34歳で77.5%、35~39歳で76.7%、40~44歳、45~49歳、50~54歳では約80%で推移して

おり、35~39歳がいわゆるM字型カーブ<sup>注</sup>の底の年齢階級となっている。

次に、年齢階級別の労働力率を1970年、1990年、2010年、2019年についてみると、男性では、労働力率に大きな変化はみられないが、60~64歳、65~69歳などでは労働力率が上昇している。一方、女性では、M字型カーブの底の労働力率が上昇しているとともに、底にあたる年齢階級が高くなっている(1970年は25~29歳、1990年は30~34歳、2010年と2019年は35~39歳)。

男性の60歳以上の労働力率の推移をみると、ここ10年程度で上昇している。これに対し女性の25~39歳の労働力率は1975年前後よりほぼ一貫して上昇傾向で推移しており、とくに25~29歳で上昇幅が大きくなっている。



注 日本の女性就業の特徴の1つ。年齢階級別の労働力率が、子育て期に低下し、アルファベットのM字の形状に似た曲線を描くというもの(厚生労働省「平成28年版働く女性の実情」公表資料より)。

(調査部 統計解析担当)